

019

令和七年度 一般推薦入学試験問題

専門課題 小論文

(初等教育コース初等教科専攻国語専修／中等教育コース国語専攻)

〔注意〕

1. 監督者の指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 監督者の指示に従って、解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。
3. この冊子は問題用紙2枚と下書き用紙2枚です。この冊子と別の解答用紙は2枚です。印刷の不鮮明な箇所などがあれば申し出てください。
4. 解答は解答用紙の指定された場所に記入してください。
5. 解答に字数制限がある場合には、句読点をすべて字数に数えます。
6. この冊子は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

文章の美などということを使うと、そこから一足飛びに、文学は芸術であるという風なことになって、これは言葉を楽しもうという時に何かと邪魔になる。美とはなどと考えなくても美という言葉が持ち出されることで例えば、富士山が雪で白くなっている所を思ったりし、それと自分が今読んでいることとどういう関係があるのかと疑い始めることから読んでいることも頭に入らなくなる。我々が必ずしも美しいと感じたくて文章を読むのではないからで、寧ろただの好奇心からでも知って置きたいことがあって字を追って行く場合の方が多い。字が言葉になり、それが何かを我々に伝えて、普通はそれ以上のことを我々は読むということに求めない。それだから文章は道具だという考えも結構行われている。

道具は役に立ちさえすればそれでいい筈である。併しそう思っていると、文章が何かを伝える道具だということには限度があるのが感じられて、例えばナイフは切れて或る程度長持ちさえすれば文句を言うことはない訳であるが、その切れるとか長持ちがするとかいうそういう意味での具体的な形で文章のようなものは役に立つのではない。長持ちがする文章ということでも勘違いしてはならないので、これは実際に一つの文章を取って眺めて見れば解ることであるが、同じ一つの文章がいつも同じではないのである。何とも思わずに読んだものを別な時に読むと急に光り出したり、その逆のことが起こったりしてこれは必ずしも我々の頭が冴えているとか冴えていないこととかに原因しているのではない。それよりも海の色などを考えて見るといいので、海は同じ一つの場所にある海でもその色は始終変わり、そしてそういう風に変わるのが海というものなのである。

又文章がその役目を果たして我々に何か伝えるのもそういう海、或いは文章というものであることによつてなのである所に文章というものの本質が認められる。何かを伝えると言つても文章は言葉で出来ていて、言葉はどういう言葉でもただ一つの意味しかないというようなものではない。例えば学術用語などはその意味が不自然な位に厳密に限定されているから幾何学の一つの命題はいつもその命題でしかないが、我々が普通に使っている言葉はそんなものではなくて、少し大袈裟な考え方をすれば、生きて行くということが厳密に限定し得るものではない以上、生きて行く為に用いる言葉も正三角形とか切点とかいう具合にその内容を隅々まで決めたくても、それが許されない。そして文章はそうして普通に使う言葉で出来ていて、学術論文のようなものは寧ろその特殊な応用と見るべきである。つまり、文章は先ず生きていなければならぬ。

生きていることが美しいかどうか、こういう問題で余り勝手な御託を並べるのは禁物である。(中略) 併し文章は生きていなければならぬ、これは我々に何かを伝える前に先ずその何かを受け入れることが出来る程度に我々の精神に働き掛けてこれを揺き立てるものを持っているという位のことと思えばいい。面白い話をすると言つて少しも面白くない話をする人間がいる。これは話の材料が面白くないのよりも、我々がそれを面白く思う程度に我々の精神を活発にしてくれるものがそこにならぬのである。多くて、言葉が死んでいるのである。所が、これは面白い話に限らなくて、何を伝えるにもこのような事情が幾分でもそこにあり、どんな言葉を使つても伝えられることは大抵は言葉を使わなくてもすむことである。例えば方向が示したければ矢を一つ書くので足りて、矢の印は言葉ではなくて一つの記号に過ぎない。

それ故に文章の美などと言うと話がこんぐらかるが、簡潔な文章とか要領を得たものとかいうことになればこれははっきりした意味があつて、誰かが書いたことがてきばきと何か伝えるべきことを我々の精神に叩き付けて来れば我々はそれを受け入れて目が覚めた思いをする。この場合、その何かが単純な性質のものだから我々に直ぐ呑み込めるのだと思つてはならない。矢印その他の図解で示せる位単純なことならば別であるが、言葉を使わなければ伝えられないことはそれが如何に当たり前なことであつてもその言葉の使い方が可笑しい時には半分も、或いは全然伝わって来ないのである。太郎は花子が好きになつたというのは書き方の問題ではなくてただそう書けばすむことなのだと思うものもあるかも知れないが、それならば小説などでそう書いてあるのを我々が読んてそれをはっきりそうと感ずることがどの位あるだろうか。恋愛小説と称しながら恋愛はどこにもありはしないので、これは美以前の問題であり、そこにも文章などというものに就いて語る難しさがある。

雨が降っていたのならば雨が降っていたと書けばいいじゃないかとチエホフは言った。その通りであるが、問題は雨が降っている時にそれを雨が降っているのだと認めるのと同じ位に着実に、或いは明快に何でも自分が伝えたい事情の性質を見極めることで、流石に天候の判断には我々人間が子供の時から馴れているのか、天気のことを文章で表すのはそう困難なことではなくて、この日は天気がよかつたと書いてあればその辺がどことなく明るくなつていて感ずる。併し太郎は花子が好きになつたということになれば、その位のことでもさえも、そう簡単にはすまなくて、これを言葉で表すには先ずその太郎という人間が言葉の上で確かにそこにいなければならず、花子も同様で、その上に更に、好きになるといふのがどういふことなのか、或いは、この特定の場合にそれがどういふことだったのか、そのことを書く人間にとつて第一にそれがよく呑み込んでいる必要がある。

(中略)

言葉は生きものであるから同じ一つの文章でもいつ見ても同じ顔付きをしていとは限らない。海とともに変化し、我々を動かす

場所が一定していなくて、これによって我々は言葉が我々に語り掛けることの違った面を知る。平家物語の文章が悲しく響くのも、勇壮に思えるのも単に我々の方でそんな気がするだけなのではなくて、何れもこの文章が我々に正當に伝えることなのである。小林秀雄氏のうちに一人の詩人を見るのも、酔っ払いが管を巻いている所を想像するのも氏の言葉の魔術、と言う所だったが、話が曖昧になるのを避けるならば、その生命力による。併し生きた文章というものはそれがどんな顔付きをしようか、その文章であって生きていることに変わりはない。これは一人の生きた人間と付き合っているのと同じである。これはそうあるべきことであって、言葉が生きているということを使い換えるならば、それが生きた人間の言葉になつていくということではない。

前にデフォオオの「ロビンソン・クルウソオ」を挙げたが、これは勿論、原文で読んだ場合としてである。言葉が同時にその言葉の内容でもあり、その言葉に就いての一切であるならば、或る文章を何かの形で変えた結果の出来、不出来はその結果によることになる。この頃は外国の作品をその訳で読むのが当たり前のようになり、又その要求に答えて大概の外国の作品にはその訳があつて、どうかするとそれが幾通りも出ているが、ここまで書いて来たことによつて一つの作品とその訳が同じ一つのものでないことは明らかである筈である。勿論、駄文をひねくり廻してそれを書いた人間がどういふことが言いたかつたのかあれこれと臆測するように、訳を苦心して読んで原作がどんなものなのか想像して見ることは出来る。併しそれはその訳が文章になつていないということでも、もし原作が文章をなしているものならばそれを文章でないものに直して何が読者に伝わるか怪しいものである。

翻訳の文章も先ずそれが一箇の独立した文章になつていなければならぬ。これが原作からも独立した文章であるのは言うまでもないことで、もしそれがそういう一箇の文章でないならばそれを読むものに何も伝わりはしないのであるから、原文から伝わるものもそこにはない。翻訳とその原文はそういう関係に置かれているのである。よく忠実な訳ということを開かされるが、国語によつて言えることと言えないことがあり、そこを無理をして体をなさない文章を書く時、これは原文に照らし見れば何故そのようなことになつたかが解るといふことで、それならば初めから訳すことはなかつたのである。又事実、訳せない文章というのはどこの国の国語でも書かれている。例えば日本の秀歌の多くは訳せなくて、これは日本の詩人が全く厳密に言葉を使つている為をそれを日本語でも他の言葉には直せないからであり、こういう例はヨオロッパの詩にも幾らでも出て来る。厳密に言えば、一流の作品はどこの国のものでも、又それが詩でも、散文であつても訳せないのではないだろうか。

つまり、翻訳も文章であつて、文章というものに就いて言えることは凡て翻訳にも当て嵌る。従つて又、翻訳などというものは殆ど機械的に出来ると考えているらしいものがあるにも拘わらず、一箇の独立した文章をなしているものがその原作に当たる外国の作品と何かの意味で連絡を保つていふ形ではか翻訳は成立しない、というのには、翻訳の用をなさない。又それは非常に困難なことのように思えるが、文章というものが一般にどんな風にして書かれるかといふことを考えるならば翻訳も全く不可能なことではないのである。或る材料が頭にあつて、それを言葉で表現するのが目的で我々は文章を書く。この場合、その材料がそれまで誰も手掛けなかつたものである必要など少しもないので、寧ろどんな文章でも、その材料をなしているものはその前に何度でも文章で扱われていると見た方が事実に近い。それならば外国の文章を読んでその一句ずつを材料に用いてこれを自分の国の言葉で表現することを試みることも、又それに成功することも決してあり得ないことではない。

正確な翻訳というのはそういうものであつて、それはこれ以外に原文に書いてあることを少しでも別な国語で生かす方法はないからであり、従つて又、逐語的に正確な翻訳などというものが仮にあつたとしても、それは全く偶然の一致に過ぎない。翻訳も文章であることをここで一度繰り返して言う必要がある。それ故に優れた翻訳ならば原文のことを考える余地がない筈であつて、それが原文であり、又そういう文章なのである。そうすると、ここで初めに戻つて、文章の美、翻訳の美の問題はどうなるのだろうか。文章はそれをなしている言葉が生きている時に我々を動かす。所で、生きているということが美しいか、醜いかは人々の判断による。併し生命の躍動は確かに美しい感じがする、とだけは少なくとも言えるようである。

(吉田健一『余生の文学』を一部改変)

問一 傍線部「文章は道具だという考え」に対する筆者の意見はどのようなものか、一〇〇字以内で説明しなさい。

問二 「翻訳」についての筆者の主張をどのように評価するか、自らの立場を明らかにしながら六〇〇字以内で述べなさい。